「慈悲とは～世のひとびとをいのる」

●「迷い犬」と「埋葬先不明」

もう、40年も前の春、迷い犬を飼い主に届けるお手伝いをしたことがありました。

その日、住宅街を歩いていると電柱に「迷い犬」のポスターが、写真入りで連絡先とともに貼ってあることに気づきました。同じ日の午後、近くの住宅街で、「迷い犬」を預かっていますという貼り紙をたまたま見つけ、結果として、その「迷い犬」は飼い主に戻りました。

次に最近の経験です。お寺にいると、思いもよらないお尋ねを受けることがあります。その人は、事情があって、親族と音信が取れなかったけれども、亡くなっていることが分かり、その埋葬先を探すため、亡き方が住んでおられた周辺にある多数の寺院に、埋葬の記録を尋ねるお便りを出され、その一通が私の寺にも届きました。

調べてみても、うちの記録にはありませんでしたので、その旨を手紙に書き、「埋葬先を探そうとされた、その志は、貴方自身を支え、生きていく上で大切な営みとなるでしょう」と讃えました。

●三種の慈悲

仏教では、相手に対するあわれみ慈しみの慈悲を小悲(しょうひ)・中悲(ちゅうひ)・大悲(だいひ)の三種に分けて説いています。

小悲は、衆生縁の慈悲ともいい、苦悩の衆生を縁として生まれる慈悲です。その人に、仏教との出会いや目覚めがなくても成立します。「迷い犬」をめぐって生まれた世間人情のレベルの思いや行いと重なります。

中悲は、法縁の慈悲ともいい、仏教の教え（法）を縁として生まれる慈悲です。教えに出会うと、自分の姿に気づいて、道理にかなった生き方で相手に関わろうとします。「埋葬先不明」となった方をめぐって生まれた思いや行いです。しかし、小悲・中悲ともに限界があります。

大悲とは、無縁の慈悲といい、縁の無かったものに対して生まれる仏の慈悲です。仏の智慧は、あらゆるものに働きかける慈悲が生まれるというのです。

かつて、お釈迦さまは、自分に背き、自分を傷つけようとした、従兄弟、悪逆のダイバダッタに対しても慈悲をもって接したといわれます。まさに、縁無き者、仏に背く者に対する慈悲、それを大悲といいます。

●如来大悲

親鸞聖人は、ご門弟に宛てたお手紙に、「念仏そしらんひとびと、この世(よ)、のちの世(よ)までのことを、いのりあはせたまふべく候ふ。（略）ただひがうたる世のひとびとをいのり、弥陀の御(おん)ちかひにいれとおぼしめしあはば、仏(ぶつ)の御恩(ごおん)を報じまゐらせたまふになり候ふべし。」（第四十三通八〇八頁）とお示しです。

（意訳：念仏を謗る人々のこの世から後の世までの幸せをいのっていただきたいと思います。（略）ただ誤った考えにとらわれ（念仏を弾圧す）る世間の人々の幸せをいのり、阿弥陀仏の本願に導こうとお思い合いになるのなら、それは仏のご恩に報いられることになると思われます。）

念仏を非難し、仏法に背く人々の姿を他人ごとではなく、かつて仏縁の無かった人たちもそうであったように、これから仏縁を恵まれる可能性のある人々だと受けとめている親鸞聖人のお心もちや接し方がうかがえます。

私たちは個人のレベルから、国のレベルまで、自分の感情や都合で、憎しみ合い、恨み合っています。しかし、改めて現代社会において慈悲を考える時、「ひごうたる世のひとびとをいのる」というご教示に向き合うことの大切を感じました。

ところで、阿弥陀「如来」の慈悲を「大悲」と受けとめられたということは、ご自分の中に、仏の心に背いていこうとする姿を深く深く見出されたということでもあったのかと、改めて聖人の尊い生き方に教えられるばかりです。

合掌

万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様・御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様・御手紙』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料・茶菓代として千円です）。

「ナムの会」は一月と十二月は休会します。